走りながら学んだ専攻科の１年

地域看護学専攻科８期生　佐々木　晶　子

「新聞に桜蓮祭のことが載ってたよ。」友人にそう言われて、どんな風に載っているのだろうと思い、新聞をみて驚いた。学祭の記事の横にある写真が、私たち専攻科生が行った健康チェックのものだったからである。写真は、住民の方に対して専攻科生が血圧測定をしているものだった。まさか健康チェックのことが載るとは思わなかったので驚いたが、専攻科の最後のときに新聞に載り、専攻科での学びの成果を住民の方に示すことが出来て良かったと思っている。

今年で私達は、８年間続いた専攻科の最後の修了生となる。過去の先輩が行ってきた活動のしっかりとした記録等をみると、過去の先輩が学習したように自分も同じようにできていたという自信はなく、あまり最後の修了生らしく立派ではなかったかもしれない。課題や資料を仕上げることで精一杯で、自分がどのくらい授業を理解して身についたのか実感がなく、もしかしたら、入学当時とあまり変わっていないのではないかと感じていた思いがあるからである。しかし、健康チェックでのみんなの様子やグループで行った地区活動を振り返ることでその考えは変わり、入学した頃よりも自分や一緒に学んできた友人皆それぞれの住民の方に対する対応が成長していることを知り、専攻科での学びは気づかないうちに自然に身についていることを実感した。

授業を通して学んだ知識や技術は、実際にグループ活動で友人と話し合ったり、地域の住民の方と接しながら身につけていくものであることを教わった。また、グループ活動からは、地区でのコミュニティミーティングや健康教育の準備のためにみんなで遅くまで残ってシナリオ直しや教材作りをしながら一緒に笑ったり、真剣に考え、意見を出し合うなかでお互い協力しあい活動を成功させる喜びを学んだ。

専攻科での１年間は、忙しくて、のんびり友人と学生生活を楽しむ時間が少なく、もっと楽しむことができたら良かったと思う。入学以来ずっと母子訪問や地区実習、市町村実習等の様々な実習や演習、講義があり、そのための準備や勉強をすることに精一杯になり、次の日寝不足で頭がうまく働かないこともあった。しかし、それは私だけのことではなく、友人を見るとみんな私と同じような顔をして学校に来たり、いつもより口数が少なかったりして、自分だけつらいのではないのだと励まされ、一緒に学ぶ友人を持つことができて良かったと実感することができた。

今思うと、専攻科での学生生活は、忙しかったけれども私自身それなりに楽しんでいたし、友人から学ぶこともたくさんあり、専攻科での１年間は貴重な時間だったのではないかと感じている。それは、専攻科に入学し、様々な経験を共有できる友人と出会い、たくさん良い刺激を得て身につけたことが多くあったし、楽しい思い出ができたからだと思う。専攻科では本当に多くのことを友人や授業から教わることができ良かった。

最後に、今までご指導してくださった地域看護学の先生方をはじめ、諸先生方や地域の方々には大変お世話になり、感謝いたします。ありがとうございました。